

室に案内した。そこで待つこと、三十分。父親が、戻って来て、私と話をしたいと言う事だったが、事実上、説教を受けた。

「たかが、十四、五でラブレターなんぞ書いて！」と言われて、「もう十六です。」と反論すると、「十五も十六も、同じだ！」と、怒鳴られた。「せめて、十八になる迄は、忘れる！」との、一方的な話だった。要するに許さないと言うことだった。今が一番将来の為に大切な時期で、勉学に励みに許さないえ上げて、立派な大人になるべきだと、声高らかに話された。いくら、私が釈明し、せめて、時々、会うだけでも許してほしいと願い出ても、聞き入れる気配は全くなかった。次第に、私の目が潤み、涙がこぼれ出した。それを見てか、「男のくせに、メソメソするな！」と、怒鳴られて、余計に涙が出てくる私だった。どのくらい長い間、説教を聞いていたか記憶になかった。外は、もう、薄暗くなっていた。やがて、もう、言う事が尽きた感じになり、沈黙がしばらく続いた。私は立ち上がり、玄関に出た。

一礼すると、待てと呼び止められて、暑い湯でしばった濡れタオルを手渡された。私はそれで顔と手を丹念に拭いた。

「十八になる迄、忘れる！」と言われ、私は、あきらめ切れなまま、どうしようもなく、ただ、懸命に勉学に励んだ。翌年、高校二年の春、校長より、アメリカの留学の話があった。私は悩んだが、結局、私はそれを希望した。そして、高校二年の冬、渡米した。アメリカに持っていけないものを、家のもの置き箱に保管した。この日記も学校の教材や衣服と一緒に入れた。

アメリカで一年半高校生活を送り、私は、そのまま、アメリカの大学に入學した。私が大学二年の冬、二十歳になった年の暮れ、三年ぶりに帰国し、再度、私は彼女に会いに家送った。そして、彼女に結婚を申し込んだ。どうもわりで思われようが、私は全く気にしなかった。ただ、彼女の気持ちを知りたかった。彼女から出た言葉は私にとっては意外だった。